

# 庄・蔵本遺跡第 20 次調査 SD312 から出土した炭化種実

那 須 浩 郎 \*

\* 総合研究大学院大学

## はじめに

徳島県徳島市庄・蔵本遺跡第 20 次調査（西病棟新営地点）の SD312 遺構から出土した炭化種実を報告する。庄・蔵本遺跡では、弥生時代前期の水田遺構や畝遺構が見つかっており、炭化種実は、弥生時代の農耕や集落構造を理解するうえで極めて重要である。本遺跡では、これまでも種実類の報告があり（歴博年代研究グループほか 2010, 佐々木・スダルシャン 2015）、弥生時代前期のイネやアワ、キビの栽培植物が報告されている。今回、SD312 遺構から出土した炭化種実の一部を同定する機会を得たので、ここに報告する。

## 試料と方法

試料は、SD312 遺構から採取された試料である。SD312 は畝遺構に隣接する溝で、ここから畝に水を取り込んでいたと考えられている。SD312 と畝遺構が接する水口にあたる地点では、焼土と炭化物の詰まった土坑が見つかった。今回同定した試料は、この堆積物をフローテーション法により水洗して得られた炭化種実の一部である（中村 2009）。なお、同試料の一部の炭化種実は、既に一部が報告されている（歴博年代研究グループほか 2010）。

炭化種実の同定は、那須の所蔵する現生標本との比較により行った。

## 結 果

同定作業の結果、以下の 11 分類群 1227 点が同定できた（表 1、図 1）。

イネ（*Oryza sativa*）は炭化穎果（いわゆる炭化米）と炭化粃軸が見つかった。炭化穎果は、破片も含めて 68 点あった。このうち 15 点は粃の断片がわずかに付着していた。炭化粃軸は、粃（小穂）の基部にある軸で、これは 6 点出土した。

アワ（*Setaria italica*）は炭化穎果が 242 点見つかった。これも内外穎の断片が付着したものが 6 点あった。

キビ（*Panicum miliaceum*）は炭化穎果が 20 点見つかった。先行研究でも既に指摘されているが、

表 1 庄・蔵本遺跡第 20 次調査 SD312 から出土した炭化種実

分類群	学名	部位と状態	SD312
イネ	<i>Oryza sativa</i>	炭化穎果（炭化米）	68
イネ	<i>Oryza sativa</i>	炭化籾軸	6
アワ	<i>Setaria italica</i>	炭化穎果	242
キビ	<i>Panicum miliaceum</i>	炭化穎果	20
ヒエ属	<i>Echinochloa</i>	炭化穎果	7
キビ連	Tribe Paniceae	炭化穎果破片	136
イネ科近似種	cf. Poaceae	炭化穎果	1
カヤツリグサ科	Cyperaceae	炭化果実	2
オオバコ属	<i>Plantago</i>	炭化種子	4
不明種子	Unknown seed	炭化種子	1
炭化木片	Wood charcoal		507
不明炭化物	Unknown carbonized grain		233
Total			1227

鎌のような細長い形態のものが多かった（歴博年代研究グループほか 2010）。

ヒエ属（*Echinochloa*）は炭化穎果が 7 点見つかった。栽培ヒエに比べてサイズが小さく野生種のイヌビエに近い形態だった。

キビ連（Tribe Paniceae）は、上記のアワ、キビ、ヒエ属の雑穀の可能性が高いが、胚やへそなどの種の同定に重要な形態が失われていたり、破片になっているもので、種や属レベルの同定が出来なかった資料である。これらは上位分類段階の「キビ連」に同定を留めた。炭化穎果が破片を含めて 136 点あった。

イネ科近似種（cf. Poaceae）は、おそらくイネ科だろうと思われる細長い形態をした炭化穎果である。1 点あった。

カヤツリグサ科（Cyperaceae）は、3 稜形をしており、径 1mm 程度で小さい。炭化果実が 2 点あった。

オオバコ属（*Plantago*）は、不規則な楕円形でへそ側は扁平だが背側は盛り上がる。炭化種実が 4 点見つかった。

不明種実（Unknown seed）は、果実内部に未成熟の種子が見られる。カヤツリグサ科の可能性はあるが、破片のため、不明種実とした。1 点のみ見つかった。

炭化木片（Wood charcoal）は、507 点が見つかった。

不明炭化物（Unknown carbonized grain）は、炭化した植物の器官のうち破片になっていたり、燃焼により形態が変化しているため、部位が特定できなかったものである。233 点あった。

## 考 察

栽培植物は、イネ、アワ、キビの3種が同定でき、これまでの結果（歴博年代研究グループほか 2010, 佐々木・スダルシャン 2015）と矛盾しない。これらは基本的には穎果の状態で出土した、イネとアワでは粃（内外穎）が付着したものも数点あり、少なくとも一部は、粃や有ふ果の状態で火を受けて燃焼したと考えられる。

栽培種か野生種かが不明なものとして、ヒエ属が挙げられる。形態的には、現在の栽培ヒエよりも明らかに小さくて細長く厚みもなく、野生種のイヌビエに近い。ただし、ヒエ属は縄文時代以降栽培利用されていたとの意見もある（Crawford 1983 など）。栽培はしていたが、形態は大きくなっていなかった可能性も考えられる。今回の資料は、立地から畠や畦畔の雑草だった可能性が高いが、栽培利用された可能性もまだ残されている。

他にも畠や畦畔の雑草だったと考えられるものに、イネ科近似種、カヤツリグサ科、オオバコ属が挙げられる。これらが炭化した状態で見つかったということは、イネ、アワ、キビの栽培植物が燃えて炭化した場所が野外だったことを示している。野外のオオバコなどの雑草が生育する場所で火を受けて炭化し、それが畠の水口の土坑に入っていた。なぜこのようなことが起きたのか、現時点では想像できないが、同様の事例の蓄積を待って、改めて考察したい。

## 引用文献

- Crawford, G. 1983 *Paleoethnobotany of the Kameda Peninsular Jomon*. Museum of Anthropology, University of Michigan, No. 73
- 中村豊 2009 「西病棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 年報 1』国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
- 歴博年代研究グループ・藤尾慎一郎・坂本稔・住田雅和 2010 「徳島市庄・蔵本遺跡群出土炭化物の年代学的調査」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 年報 2』国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
- 佐々木由香・バンダリ スダルシャン 2015 「庄・蔵本遺跡第 27 次調査出土の炭化種実」『国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 紀要 1』国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室

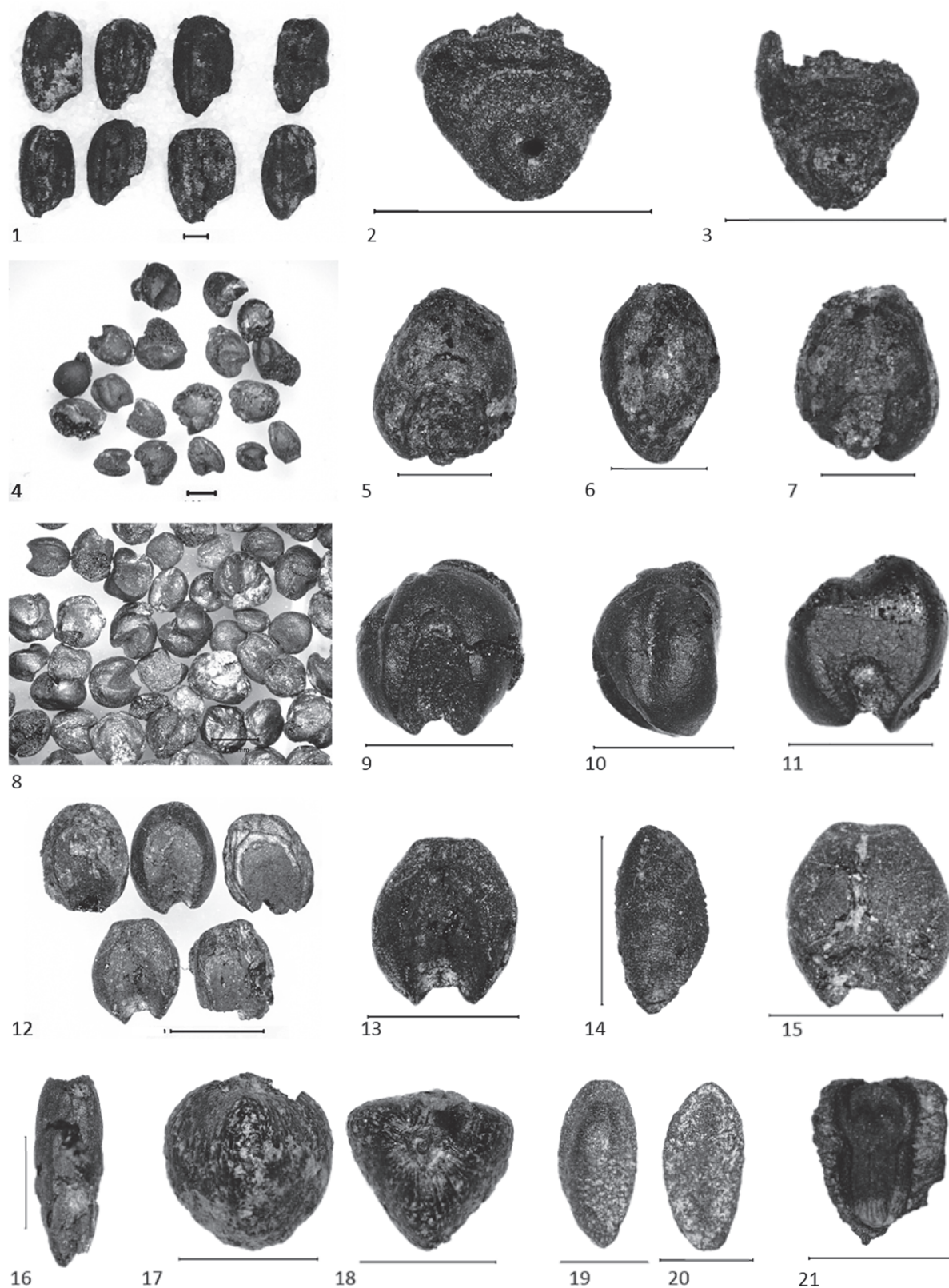


図1 庄・蔵本遺跡 SD312 から出土した炭化種実

1：イネ炭化穎果、2－3：イネ炭化稃軸、4－7：キビ炭化穎果（5：胚側、6：側面、7：へそ側）、8－11：アワ炭化穎果（9：胚側、10：側面、11：へそ側）、12－15：ヒエ属炭化穎果（13：胚側、14：側面、15：へそ側）、16：イネ科近似種炭化穎果、17－18：カヤツリグサ科炭化果実（17：側面、18：柱頭側）、19－20：オオバコ属炭化種子（19：背面、20：腹面）、21：不明種実。スケールは1mm。